

平成 25 年度 海外臨床薬学研修報告書
「アメリカの薬学教育、薬剤師、薬学生か
ら学ぶべきこと」

研修期間：平成 25 年 7 月 17 日～7 月 29 日

研修先：サンフォード大学薬学部

薬学部薬学科 6 年

080973250

蜂須賀美沙子

2013年7月17日から29日までの期間、アメリカのアラバマ州サンフォード大学にて行われた海外臨床研修に参加した。私は4年次にこのサンフォード大学の研修報告会を聞き、日本の薬剤師より十数年先のことを行っていると言われていて、アメリカの薬剤師について実際に自分の目で見てみたいと強く思っていた。また、5年次の実務実習を通して、薬局や病院などにおける日本の薬剤師の仕事や薬剤師の在り方について考え、薬剤師として働くうえで、今後どのようにすればより良い薬剤師になれるのか、どのようなことが患者により良い医療を提供することになるのかと漠然としている考えを明確化するために参加した。

まず、講義ではアメリカの薬学教育について学んだ。アメリカではまず、Pre-Pharmacyに必要な教養の単位をとり、薬学専門の大学に入学する。入学する際には、筆記テストや面接があり、倍率も高くとても狭き門であることを学んだ。そのため、アメリカの薬学生は入学の時点でとても志が高く、さらに1年次から各医療機関で実際に現場に出て実習を行っており、現場重視の教育が行われている。5年次になって初めて実務実習を行う日本の薬学生と比べて薬剤師として働く意識の違いを実感した。また4年生など上級生が下級生を指導するという制度も整っており、日本の薬学教育が取り入れるべきことが随所にみられた。

私たちはいくつかのグループに分かれ、サンフォード大学の提携医療施設において研修を行った。私はChildren Hospital of AlabamaとFMS Pharmacyで研修を行った。

まず、Children Hospital of Alabamaの研修について報告する。Children Hospital of Alabamaは小児科の総合病院で、2012年8月に増築されたアメリカ南部の小児科の病院では2番目に大きい病院である。この病院の薬剤部では日本と同じようにピッキング、TPNなどの混注などが行われていた。しかし、このような仕事を日本では薬剤師が行うところをテクニシャンや機械が行っていたことに驚いた。Children Hospital of Alabamaの薬剤師の仕事はテクニシャンや機械が行った仕事を鑑査することであり、その分、病棟などより患者のケアに薬剤師が力を注いでいた。病棟はPICUを見学した。PICUでは、薬剤師2名が24時間常駐しており、患者の少しの変化にも対応できるような体制になっていた。また、薬剤師は医師の回診に同行し、患者一人一人について現在の状態はどうか、どのような薬物治療を行えばよいのか、などをディスカッションし、投与量の決定や他の医療スタッフからの質問に答えていた。5年次の実務実習の際に回診に薬剤師が同行していたが、薬剤師が発言することは無かったので、アメリカの薬剤師は薬剤師としての立場を確立していることがわかった。今回の研修ではアメリカの薬学生がいなかったため、どのような実習を行っているのかを聞くことができなかったが、Children Hospital of Alabamaでは、シミュレーションセンターがあり、この施設で新人の医師や看護師、薬剤師などの教育を行っている。シミュレーションはコンピューターで制御されている人形の患者を用いて行われる。今回は看護師のチームであったが、薬剤師が参加するローテーションもあり、6~7人のチームで1つの症例に対してシミュレーションする。このようなシミュレーションは名城

大学でも行われおり、以前に私も授業の中で取り組んだことがあったが、Children Hospital of Alabama で行われていたシミュレーションは本番さながらの緊迫感であったことに驚いた。シミュレーションであるからと言って手を抜かず、真剣に取り組む姿を見て厳しい入学試験を突破し、早期から現場に出て実習を行っているアメリカの薬学生の意識の違いを実感し、見習わなくてはならないと思った。

次に FMS Pharmacy での研修について報告する。FMS Pharmacy は OTC 販売と処方せんの受付をしている薬局である。他には糖尿病患者用の靴や靴下、椅子、日用品なども販売している。FMS Pharmacy で薬剤師が行っていることは、簡易診断室で血糖測定やコレステロール測定などの血液検査、エイズの検査、予防接種を行っていた。日本では薬剤師が実際に患者の検査を行うことはしていないので、アメリカでは検査を行うことによって、薬剤師がより患者に寄り添い、深く治療に携わっていけると学んだ。また、日本では薬剤師が患者に注射をすることはできないので、アメリカの薬剤師は注射の技術まで身につけていることに驚いた。さらに私は精神科の外来で研究活動を行っており、いつも看護師が注射するのを見ていたリスパダールの注射剤や、インヴェガの注射剤が薬局の冷蔵庫にあったことも日本にはないことで印象的であった。ピッキングでは、病院と同じようにテクニシャンが行い、薬剤師は鑑査をしていた。投薬については、リフィル処方が多いためか渡すだけとなっている印象で、患者と接する場面では、日本の薬局の薬剤師の方が丁寧で、Do 処方でも患者の変化や日々の生活について患者に尋ねていると感じた。日本で普及しているお薬手帳というものはアメリカには無く、その代わりに初回の面談に時間をかけて行うということであった。日本でもまだ普及率や活用方法について課題のあるお薬手帳であるが、FMS Pharmacy の薬剤師の先生にも「良い制度だと思います。アメリカにもそのようなものがあれば便利だと思う。」という意見をいただき、日本でお薬手帳の利用についてもっと普及していく必要があると考えた。

今回、この海外研修に参加し、アメリカの薬学教育、薬剤師についてとても多くのことを学ぶことができた。研修に参加する前に「日本の薬剤師より十数年先のことを行っている」と学んでいたが、実際には日本の薬剤師も少しずつアメリカの薬剤師に近づいているのではないかという印象だったが、まだまだアメリカの薬剤師に比べれば出遅れていることは明らかである。しかし、今回の研修では薬学に関するだけでなく、アメリカと日本の文化の違い、医療制度の違いなど様々な違いがあることを学んだ。そして、アメリカの薬学教育、薬剤師について良いところはもちろん、日本にいただけではわからない日本の薬学教育、薬剤師の良いところもたくさん発見することができた。また、日本もアメリカの薬剤師も「患者さんのためにより良い医療を提供するためにはどうすれば良いか」と考えていることは共通であった。このことから、アメリカの背中をだた追いかけるだけではなく、日本の良いところはさらに伸ばし、アメリカの良いところを取り入れ、日本独自の薬学教育、薬剤師を確立する必要があると考えた。今回の研修は来年から薬剤師として働くうえでとても貴重な体験となった。今回学んだことを忘れずに、意識を高く持ち、

何事にも積極的に取り組んでいきたい。